

「ものを造るまちづくりから、記憶を呼び起こすまちづくりへ」

山口県景観アドバイザー 原 和人

躰という漢字がある。身の美しさである。内面の美しさが姿、かたち、しぐさにあらわれてくるという意味である。日本人が、美しい、淑やか、といわれてきた（評価をされてきた）心の美しさをあらわす言葉である。欧米のマナーとは少し違う意味がある。今、この躰が失われつつある。日本人が日本人の良さを失いかけている。個人主義が利己主義となり、目先の利益を追いかける中で日本という国自体の躰がないがしろにされてきた。

地域らしさ、風土、歴史、文化は、まさしく内面の美しさである。その美しさを姿、かたちにあらわしていくということが景観をつくるということであろう。まさにまちを創るということであるが、どこのまちも「まちの躰」を怠ってきた。とりわけ、まちの中心部で「躰」をやり直すというのは至難の業である。経済の発展という幻想を抱きながら、活性化という言葉に惑わされ、陳腐な商業施設やマンションが乱立するまちを、どう「躰の」良いまちに変えていくか。がこれからの「まちづくり」、「景観づくり」の課題といえるが、まさしく難儀である。

一方、中心部からそう遠くないところに美しい自然が生きている。やまぐちの良さである。日本の良さ、日本人の良さを感じる場はたくさんある。大切なことは、この場の「躰」を間違えないことであろう。上っ面の美しさではない、味わいのあるまち、絵になるまちを、場に暮らす人々が創り上げることであろう。その場にしかない、長い時間の中で織りなしてきた文化をもう一度再確認し、守り、活かしていくことで、中心部とは違うわがまちの顔が出来上がるような気がしている。

ものを造るまちづくりから、記憶を呼び起こすまちづくりへ。